

大学一年生の進路意識に関する実証的検討

——ある私立大学での調査から——

松 田 照 美

1. はじめに—大卒学歴の目的化—

バブル崩壊後の1992年に「就職氷河期」という言葉が誕生して以降、大学生の就職難という状況は、2007年前後の一時期を除き、定着しているかのように見受けられる。

事実、大学生の就職率¹⁾は1992年の79.9%から長期低落傾向にあり、2010年は60.8%、2011年は61.6%であった。

この間、大学進学率は26.4% (1992年) から50.9% (2010年) に上昇し、大学入学者数も1992年の約54万人から2010年の約62万人へと増加している²⁾。大学の定員増と少子化とが相まって2007年頃から「大学全入時代」といわれる状況も生じ、入試形態の多様化とともに学生の学力レベルや勉学意欲においても多様化が生じている。

そうしたなかで、高校生の大学進学目的は、日本私立大学連盟が2010年10月に実施した『第13回学生生活実態調査』によれば「大学卒の学歴が必要だと思ったから」が56.6%で最多となっている。なお、同調査において、この「大学卒の学歴」を進学目的とする回答は2002年、2006年においても最多であるが、それぞれの数値は45.6%、50.2%であり、近年になるほど割合が高まっている。

学校を卒業して就職するにあたって「高卒」、「大卒」という区分があり、より有利な職に就くためには「大卒」という肩書が必要という現

実の中で、大学への進学を選択するのは合理的であるといえよう (上西, 2009, p. 98)。

しかし、「学歴」のために大学に進学することと、大学での学びをとおして職業的自己実現を図るということとは必ずしも結びついていない。

本論では、大卒学歴を目的化した進学が拡大している中の学生たちの進路意識を明らかにし、職業への移行に及ぼす影響を考察することで、キャリア形成に向けて初年次に必要とされる学習を提示したい。

2. 大学での学びと就職

では、大学の学びと就職との関連はどうなっているのだろうか。

金子は、大学教育の目的について次の3つの志向を設定している。すなわち、「特定の専門的な職業への準備」、「専門的な知識の獲得の過程を通じてそれぞれの広い専門分野での基本的考え方を体得することによって、職業やあるいは将来の生活における基本的な思考方法を獲得する [中略] (学術) 専門志向」、「成人として必要な一般的な知識やものの考え方を獲得する [中略] 教養志向」(金子, 2007, pp. 32-34) である。

いずれの志向も、教養と専門的能力を培うことにより、大学教育を終えた若者が労働市場に参入して職業的自己実現を果たすにあたっての

素地づくりであるといえよう。

また、大学の職業的意義について、本田は次のように述べている（本田，2009，pp. 119-120）。

ただし、日本における大学と仕事との関係のあり方は、大学教育の専門分野によって異なる様相を見せる。
[中略] 保健, 家政, 教育, 芸術など、大学の教育内容自体が専門職養成的性格が強く、卒業後もそれに即した職業に就く者が多い分野については、大学教育の「職業的意義」は高い。それに対して、とくに人文科学や社会科学という分野については、大学の教育内容そのものが対応する職業分野を意識して設計されておらず、卒業後も主に民間企業内部において専門的ではないキャリアをたどる者が多いため、「職業的意義」の水準は低い。

また、『平成23年版労働経済白書』は、「大学学科間の入学動向と就職動向の違いをみると、大学進学率が上昇した1990年代以降、指標は上昇傾向にあり、入学動向と就職動向の違いが大きくなっている」とし、また「学科別に就職も進学もしない割合をみると、人文科学、社会科学、家政、芸術などの文系学科が高く、一方、理学、工学、農学、保健などの理系学科では相対的に低い水準である」と分析している（厚生労働省 2011 pp. 136-138）。

これらの指摘は、大学から職業への移行において専門分野によって差異があること、とくに人文科学・社会科学分野の教育は職業との関連が希薄であり、その卒業生の進路が不安定となっていることを示している。

前述したように、大学進学が「大学卒

の学歴のため」が最多となっており、そこには何を学びたいか（身につけたいか）という意味や、何になりたいかという具体的な職業をふまえた将来設計が不十分なまま大学に入学する学生が少なくない状況がある。

そうした将来への展望や自己認識が不明確ななかで「職業的意義」の低い専門分野に進んだ学生は、大学教育と自分の進路とを関連づけることができず、大学教育に目的意識や主体性を見いだせないまま、「学ぶ」のではなく「教わる」という受動的な姿勢に終始する。

そして、「自分は何をしたいのか」、「仕事には何が求められているのか」、「働くことはどういうことなのか」といった職業を見据えた自己認識、社会認識に向き合うことなく、シューカツを迎えることになる。

3. 若者の職業意識

一方、若者たちは働くことにどのような意識をもっているのだろうか。

（財）日本生産性本部が新入社員に対して毎年実施している『働くことの意識調査』³⁾で働く目的をみると、2010年では「楽しい生活がしたい」が38%で1位、以下「経済的に豊かな生活をしたい」22%、「自分の能力を試す生き方をしたい」17%と続いている。同調査の1990年では「楽しい生活がしたい」が33%で1位、以下「自分の能力を試す生き方をしたい」と「経済的に豊かな生活をしたい」が同じ25%となっている。

また、同調査で会社の選択理由をみると、2010年では「自分の能力・個性が生かせるから」が35%で1位、以下「仕事が面白いから」25%、「技術が覚えられるから」9%、「会社の将来性を考えて」8%と続いている。同じく

1990年では、「自分の能力・個性が生かせるから」が28%で1位、以下「会社の将来性を考えて」21%、「技術が覚えられる」11%、「仕事が面白いから」8%となっている。

これらの調査から、近年の新入社員の働くことに関する意識は、「能力を試す」といった挑戦的な生き方より、自分が「楽しい生活」をすることを主眼にしていること、及び、企業の一員として企業の成長・発展に寄与していく意識は希薄となり、自分自身の能力・個性発揮や面白さをより重視して、仕事が「自分に合っている」ということを求めていることがうかがえる。

大学で学んだこと（知識や技術）を活かして職業的自立を図りたいというより、「自分らしさ」を大切にできる空間（＝職場）で楽しく自分らしく働きたいということだと考えられる。

若者の職業意識は、大学での学びとは直接にはつながらない「自分らしさ」を発揮することであり、自己認識が不明確なままに「自分に合っている」という抽象的で曖昧なイメージを軸とするがゆえの脆弱さを免れない。

そのため、いざ就職活動を始めるにあたり、「自分は何をやりたいのかわからない」、「どんな仕事が自分に合っているかわからない」などとして自分自身を見失い、進路決定の前に立ちすくんでしまう学生も見受けられる。

進学や就職が決まらず、一時的な仕事に就いてもいない新卒者の割合は、2010年が16.1%、2011年が15.9%⁴⁾であるが、その要因は景気変動の影響だけでなく、学生自身の職業未決定という問題も含まれると推測できる。

また、大卒者の就職難が続いている一方で、入社後3年以内に辞めていく正社員の早期離職傾向になかなか歯止めがかかっていない状況がある。

厚生労働省の『新規学校卒業者就業者の就職離職状況調査』によると、大卒入社後3年以内の離職率⁵⁾は1995年以降30%台となり、2000年以降は35%前後の水準となった。

2007年3月に大学を卒業した者の離職率は31.0%であり、そのうち半数近くが就職1年目に離職している。その理由として「仕事が自分に合わない、つまらない」(39.1%)、「賃金や労働条件等の条件が良くない」(32.6%)と回答している。

早期離職の背景には厳しい就業環境という面はあるが、社会や仕事、そして自分自身についてのリアルな認識を欠いたまま、仕事が「自分に合っている」かどうかという抽象的なイメージを判断の基準とする脆弱さもその要因となっていると考えられる。

4. 大学1年生の進路意識

1. 2. 及び3. では、大学進学率の上昇とともに「大卒学歴」を進学目的とする学生の増加と、大学の学びと職業とを関連づけることなく『自分らしさ』を重視する学生の曖昧な職業意識について述べた。

しかし、そもそも学生は入学時点において、進路決定を規定する職業への準備状態ともいえる進路意識の成熟度はどのような状態なのだろうか。

そこで、大学生の進路成熟の実態を明らかにするために本学の1年生を対象にして質問紙調査を実施した。

調査時期は入学間もない4月の第2週の授業時に実施し、983名から回答を得た。そのうち回答に不備のない887名を有効回答として分析に用いた。

887名の内訳は、女子216名、男子671名で

表1 自己実現的態度

	全体	女	男	経済	政策	商	経営 情報	英米語	中国C	国文 協力
問 1	4.3	4.21	4.32	4.25	4.27	4.24	4.39	4.41	4.29	4.47
問 4	4.03	3.97	4.06	4.06	4.08	3.88	4.01	4.09	4.12	4.29
問 7	3.78	3.7	3.81	3.74	3.75	3.72	3.72	4	4.03	3.91
問 10	4.12	4.01	4.16	4.06	4.16	3.96	4.34	4.24	4.21	4.26
問 13	4.18	4.2	4.17	4.1	4.14	4.18	4.3	4.27	4.35	4.21
問 16	4	3.94	4.02	3.89	4.05	3.93	3.92	4.3	4.03	4.15
問 19	4.17	4.18	4.17	4.08	4.23	4.12	4.23	4.27	4.47	4.18
問 22	3.74	3.68	3.76	3.63	3.72	3.73	3.81	3.94	3.82	3.91
問 25	3.48	3.48	3.48	3.42	3.58	3.28	3.57	3.67	3.41	3.79
問 28	3.79	3.72	3.81	3.7	3.82	3.74	3.82	3.88	3.97	4.03
	39.59	39.09	39.76	38.93	39.8	38.78	40.11	41.07	40.7	41.21

あり、学科別には経済学科271名、政策学科165名、商学科184名、経営情報学科88名、英米語学科111名、中国コミュニケーション学科34名、国際文化協力量科34名であった。

尺度は、(財)日本進路指導協会の「進路成熟尺度」⁶⁾(表4 参照)を用いた。

「進路成熟尺度」は「自己実現的態度」、「進路計画」、「進路決定」の3つの因子から構成され、それぞれ10項目から成り立ち全30項目である。回答は、“ほとんどあてはまらない(1点)”から“非常にあてはまる(5点)”までの5点法で実施した。

得られた回答から因子ごとに項目得点と尺度得点を算出し、性別、学科別に得点を比較した。

(1) 自己実現的態度(表1 参照)

自己実現的態度は、職業をとおして自己実現を図る意識に関する10項目により構成されている。

全体の尺度得点は39.59であった。

項目の得点をみると、「項目1 生きがいのある生活を送りたい 4.30」がもっとも高く、

次に「項目13 自分が本当に満足できる仕事につきたい 4.18」、「項目19 人間的に成長したい 4.17」となっている。一方、得点が低いのは「世の中や社会のために役立つ人間になりたい 3.48」である。

このことから、全体では自分自身にとっての自己実現を重視しており、社会との関わりでの自己実現といった意識は薄いといえる。

性別で尺度得点をみると、女子39.09、男子39.76で、男子のほうが自己実現的態度はやや高い。項目で得点差が大きいのは、「項目10 自分の人生をもっとすばらしいものにしたい 女子4.01 男子4.16」であり、男子のほうが自分の将来を築くことへの意欲がより強いと考えられる。

学科別の尺度得点は、経済学科38.93、政策学科39.8、商学科38.78、経営情報学科40.11、英米語学科41.07であり、相対的に英米語学科の自己実現的態度は高い。

項目でも、英米語学科はほとんどの項目で他の学科に比べ得点が高い。とくに、「項目7 自分のいろいろな能力を生かしたい 経済3.74、政策3.75、商3.72、経営情報3.72、英米

表2 進路計画

	全体	女	男	経済	政策	商	経営 情報	英米語	中国C	国文 協力
問 2	2.95	3.02	2.93	2.83	2.96	2.99	3.02	3.1	3.03	2.94
問 5	2.61	2.62	2.61	2.52	2.68	2.65	2.66	2.71	2.59	2.47
問 8	2.36	2.41	2.34	2.33	2.35	2.43	2.14	2.61	2.18	2.18
問 11	2.84	2.94	2.8	2.69	2.91	2.88	2.69	3.11	2.94	2.85
問 14	2.79	2.89	2.76	2.66	2.87	2.73	2.98	3.07	2.56	2.71
問 17	3.29	3.41	3.25	3.16	3.39	3.33	3.17	3.48	3.53	3.09
問 20	2.46	2.47	2.45	2.37	2.52	2.5	2.41	2.54	2.47	2.5
問 23	3.1	3.25	3.06	2.98	3.1	3.17	2.94	3.39	3.21	3.15
問 26	2.78	2.84	2.76	2.59	2.88	2.8	2.67	3.08	2.94	2.79
問 29	2.79	2.75	2.8	2.67	2.9	2.84	2.76	2.99	2.5	2.65
合計	27.97	28.6	27.76	26.8	28.56	28.32	27.44	30.08	27.95	27.33

語4.00」,「項目16 自分の得意なことをもっと伸ばしたい 経済3.89, 政策4.05, 商3.93, 経営情報3.92, 英米語4.30」において, 他の学科との得点差が大きい。

この2項目は自分の保有する能力にかかわる質問であり, 英米語学科の場合, 自分が得意とする外国語(英語)をさらにレベルアップして生かしていくことによって自己実現を図りたいという意識が強いといえる。

一方,「項目10 自分の人生をもっとすばらしいものにしたい 経済4.06, 政策4.16, 商3.96, 経営情報4.34, 英米語4.24」及び「項目13 自分が本当に満足できる仕事につきたい 経済4.10, 政策4.14, 商4.18, 経営情報4.30, 英米語4.27」については, 経営情報学科の得点が高かった。これは自分の将来と仕事選びについての関心が相対的に高いことの表れと思われる。

(2) 進路計画 (表2 参照)

進路計画は, 将来の職業に向けて実際的な活動をどれくらい行っているかに関する10項目で構成されている。

全体の尺度得点は27.97であった。

項目の得点で高い得点を示しているのは,「項目17 将来の仕事や職業についていろいろ考えている 3.29」,「項目23 どんな仕事をしたいのかよく考えている 3.10」である。一方, 低い得点を示しているのは,「項目8 希望する職業につくために, 特別な勉強や準備をしている 2.36」,「項目20 将来つきたいと思っている仕事の内容をよく理解している 2.46」である。

このことから, 将来どんな仕事につきたいかあれこれ考えてはいるけれど, 具体性に欠けているために, 何をしたいのか分からないという状態にあると考えられる。

尺度得点を性別でみると, 女子が28.60, 男子が27.76であり, 女子のほうが将来の進路について考えていることがうかがえる。項目得点で男女差が大きいのは,「項目23 どんな仕事をしたいのかよく考えている 女子3.25 男子3.06」,「項目17 将来の仕事や職業についていろいろ考えている 女子3.41 男子3.25」である。

このように, 女子のほうがより深く将来の仕

表3 進路決定

		全体	女	男	経済	政策	商	経営 情報	英米語	中国C	国文 協力
問	3	2.89	3.09	2.82	2.79	2.81	2.89	2.72	3.15	3.26	3.21
問	6	2.95	3.08	2.91	2.82	2.87	3.04	3.01	3.18	3.03	2.88
問	9	3.12	3.2	3.09	3.01	3.11	3.21	3.18	3.25	3	3.09
問	12	2.95	3.09	2.91	2.91	2.93	3.05	2.89	3.12	2.71	2.82
問	15	2.92	2.94	2.91	2.85	3	2.91	2.85	3.12	2.82	2.74
問	18	3.34	3.47	3.3	3.24	3.29	3.38	3.19	3.6	3.76	3.35
問	21	2.96	3.02	2.94	2.84	3.06	2.98	2.93	3.09	3.06	2.94
問	24	3.81	3.89	3.78	3.8	3.77	3.84	3.92	3.69	3.91	3.91
問	27	3.7	3.74	3.68	3.67	3.65	3.69	3.65	3.75	4	3.79
問	30	2.25	2.08	2.3	2.13	2.46	2.28	2.42	2.26	1.85	1.88
合計		30.89	31.6	30.64	30.06	30.95	31.27	30.76	32.21	31.4	30.61

事について考えているのは、日本社会において女性が働いている職業に関して情報が乏しいことに加え、結婚や子育てなどのライフイベントと職業との関わりにおいて男性と異なり選択肢が多いために、自分の生き方をいろいろ意識する状況にあるからではないだろうか。

学科別の尺度得点は、経済学科26.80、政策学科28.56、商学科28.32、経営情報学科27.44、英米語学科30.08であり、自己実現的態度の得点が高い英米語学科は、進路計画においても他学科に比べて高い得点を示した。項目別でみると、「項目11 はっきりした将来の目標をもっている 経済2.69、政策2.91、商2.88、経営情報2.69、英米語3.11」,「項目14 将来つきたい仕事が自分に向いているかどうか検討している 経済2.66、政策2.87、商2.73、経営情報2.98、英米語3.07」,「項目26 自分が本当にやってみたい仕事は何かよくわかっている 経済2.59、政策2.88、商2.80、経営情報2.67、英米語3.08」の3つは、英米語学科のみが3.0以上の得点を示している。他の学科に比べ、英米語学科は将来の仕事について具体的なイメージを描いているといえる。

一方、経済学科はもっとも低い尺度得点を示した。項目別にみると、英米学科が高い得点を示した項目11, 14, 26がもっとも低い得点であった。先に述べたように、この3つの項目は具体的な仕事イメージを有するか否かに関連する項目である。これらの項目得点の比較から、経済学科は他の学科に比べて具体的な仕事イメージをもてずにいることがうかがえる。

(3) 進路決定 (表3 参照)

進路決定は、自分の進路を決定するにあたっての自信や意志の強さに関する10項目で構成されている。なお、項目3, 9, 12, 24, 27, の5つは逆転項目であるので、得点のつけ方は逆になっている。

全体の尺度得点は30.89であった。

性別では、女子31.60、男子30.64であり、女子のほうが進路決定にあたっての意志がやや強いと見受けられる。

学科別の尺度得点は、経済学科30.06、政策学科30.95、商学科31.27、経営情報学科30.76、英米語学科32.21であり、英米語学科が高い得点を示した。

項目についてみると、全体、性別、学科別のいずれも同じような傾向を示している。すなわち、「項目24 どんな仕事につくかは、その時になって決めればよい 全体3.81、女子3.89、男子3.78、経済3.80、政策3.77、商3.84、経営情報3.92、英米語3.69」と「項目27 これからの進路について、今はまだ考えたくない 全体3.70、女子3.74、男子3.68、経済3.67、政策3.65、商3.69、経営情報3.65、英米語3.75」の得点の高さと、「項目30 自分の将来の仕事や職業を決めることに不安を感じていない 全体2.25、女子2.08、男子2.30、経済2.13、政策2.46、商2.28、経営情報2.42、英米語2.26」の得点の低さである。

このことから、自分の進路の決定をシェーカーまで先送りせずに早い時期から考えておくべきだという意識がうかがえる一方、自分の進路を決めることへの不安感が強いことがわかる。

とくに、項目30の女子の得点の低さは、将来の結婚・出産を考えたときの職業展望が不明確とならざるを得ない日本のジェンダー状況が影響していると考えられる。また、同じ項目30について経済学科の得点が低いのは、進路計画で述べたように、具体的な仕事イメージをもてずにいることと関連があると思われる。

他方、英米学科は「項目18 こういう仕事をしたいという希望をもっている 経済3.24、政策3.29、商3.38、経営情報3.19、英米語3.60」及び「項目3 これから先の進路を決めていない 経済2.79、政策2.81、商2.89、経営情報2.72、英米語3.15」で相対的に高い得点を示し、進路の決定について他学科に比べて明確な意思をもっているといえよう。

5. 考察—キャリア形成支援に向けて

以上の調査結果を進路成熟の3つの側面からみると、本学一年生は自己実現的態度(39.59)と比較して進路計画(27.97)と進路決定(30.89)の得点が低い結果が示された。

これは、自己実現を目指したいという思いはあるけれど、具体性を欠いているために進路に向けた計画や決定を現実的にすることができないでいる—すなわち、進路に関する準備状態が不十分であることを示している。

例として、将来展望の曖昧さを反映した経済学科における進路計画・進路決定の低い尺度得点が挙げられる。事実、経済学科の少なからぬ学生たちは、「つぶしがきくから……」、「本当は化学を勉強したかったけれど、数学が出来なかったから……」、「どこに行っても同じだと言われたから……」等、専門分野と直接的に結びつかない学部選択の理由を挙げる。そのため、自分の将来にとって大学教育がどのような意味をもつか曖昧であり、進路を大学の学びの延長線上から指向することができないでいる。

Jordanによれば、職業的発達段階において16～25歳は探索期にあたり、青年前・中期では自分に適切だと思ふ職業の水準や分野についておおその予想をたて、高等教育に移行する青年後期では大まかな予想のある特定の仕事に絞り込み、そのための訓練を受け準備をする時期であるとしている(Jordan, 1974 p. 269)。

しかしながら、日本における中高の学校教育では将来の職業を意識した体系的教育が手薄であり、進路指導とは多くの場合、学力の偏差値と家庭の経済力をもとにした受験指導のことである。そのため、中高の進路指導では入学可能な上の学校に進学することが主眼となり、自分のやりたいことや将来のことは大学に入ってから

ら考えればよいと自分の生き方に無自覚なまま入学する学生が多数存在する。「大学全入時代」といわれるなか、文系で選抜性が比較的低い大学でこうした学生が増加している。

筆者が学生たちに課す進路に関するレポートにも、「将来やりたい事もなく自分が何をしたいのかも分からない」とか「自分には働くということがどういうものなのか、はっきり認識がされていない」といった類の記述がたくさん見られる。

自己認識や将来展望が曖昧で脆弱な学生にとっては、「学歴」としてではなく大学教育が自分の将来にどのような意味をもつか不明確である。それゆえ、学びへの主体的な参加に乏しく、ラクに単位を取れる授業や座ったままで与えてくれる授業を求め、大学生生活のなかで受動的な姿勢を固着させていく。

就職活動とは自らの責任で進路を選択・決定し選ばれることであり、そのためには明確な自己認識/社会認識と主体性が不可欠である。

しかし受動的な姿勢を固着させた学生にすれば、このようなテンションを求められる就職活動は高いハードルとなり、そのため職業未決定の状態に陥ったり、活動から脱落して就職を諦めたりする可能性が高い。

それでは、調査結果に示されたような進路に関する準備状態が乏しい学生たちに必要なキャリア形成支援とはどのようなものだろうか。

多くの場合、キャリア形成支援として展開されているのはキャリア科目（自己理解、職業事情、マナー、筆記試験対策、等）やインターシップ、資格取得、及び面接対策、エントリーシート指導などの就職支援である。これらは就職活動の直接的な支援だけでなく、学生自身に自分のキャリアを考えさせる契機も含んでいる。ただし、これらの取り組みは、将来の自分

について学生自身が方向性のある程度見定めていることを前提に、主体的に取り組んでこそ有効に機能する。

脆弱な自己認識や将来展望にある学生にとってまず必要なのは、大学教育の中で学生自身が「自分はどのような人間なのか？—何が得意で、何に興味があり、人とどう関わるか」といったことに向き合う機会/経験である。ここでいう機会/経験とは、単にそうしたテーマに向き合う時間や課題を与えられるのではなく、直接的な体験をさまざまに積み重ねることである。

直接的な体験というとインターンシップや留学などがあるが、大学教育では日常の授業において自分に向き合い主体的参加をを促す「体験」に目を向けるべきであろう。

例えば、半期又は一年をとおしてメンバーを固定化せずに問題解決や授業企画などのグループワークやディスカッションを何度も繰り返し経験させる授業⁷⁾である。その都度メンバーが代わり授業内容が多様であることで、グループの中での自分の役割や立ち位置も変化する。また、いろいろな学生と交流する機会ともなり、見知らぬ相手とコミュニケーションする経験を重ねることになる。

もちろん、アウトプットとしての発表やレポートの作成を日常化することも肝要である。

受け身な学生を授業という教育活動の中で半強制的に揺り動かして、学生が戸惑いながらも初対面の者同士でコミュニケーションを図り、課題に取り組み、自分の役割をさまざまに果たすよう仕向けるのである。

自己認識や将来展望の希薄な一年生は、管理が緩く知り合いのいない大学では漫然となりがちで、ドロップアウトするリスクも内包する。しかし、協働学習をとおして知り合いづくりや学習方法を習得し、自己の理解と開発という実

感を得ることができるなら、大学生活や学びのなかに自分にとっての意味や落ち着きどころを見出すことにつながる。

それは曖昧な「自分らしさ」に実質を与えるものであり、また、職業人にとって重要な協働力や自主性、コミュニケーションスキルの育成ともなりうる。

大学の学びに目的意識の希薄な学生が増加している状況では、学生に授業への主体的参加を促し、学生の自己認識を覚醒し人間的成長を可能にする直接的体験（＝授業）を不断に提供していくことが大学の重要な役割となっているのではないだろうか。

注

- 1) ここでの就職率とは就職者数を卒業者数で割ったものであり、各年3月卒業生の5月1日現在の状況から算出している。データ出所は文部科学省「学校基本調査」。
- 2) データ出所は文部科学省「学校基本調査」。
- 3) (財)日本生産性本部が1966年以来実施している調査であり、「新社会人研修村」に参加した広い意味での中堅企業の新入社員が調査対象である。
- 4) 他に、「一時的な仕事に就いた者」は2010年に3.6%、2011年に3.5%であった。
- 5) この離職率は厚生労働省が管理している雇用保険被保険者の記録を基に算出したもの。
- 6) この尺度は、高校生の進路意識の発達度合いを把握するために開発された。

- 7) この事例は、筆者の実践経験に加え、「くたばれ！ 就職氷河期」（常見）で紹介されていた北九州市立大学の取り組みにヒントを得たものである。

引用・参考文献

- 東清和（2003）「現代青年の進路意識の発達」東清和・安達智子編著『大学生の職業意識の発達』学文社
- 日本私立大学連盟（2011）『第13回学生生活実態調査報告書』社団法人日本私立大学連盟
- 本田由紀（2009）『教育の職業的意義』筑摩書房
- Jordan, J. P. (1974) Life Stage as Organizing Modes of Career Development. in Herr. E. L. ed., *Vocational guidance and human development*, University Press of America, p. 268
- 金子元久（2007）『大学の教育力』筑摩書房
- 小杉礼子編著『大学生の就職とキャリアー「普通」の就活・個別の支援』勁草書房
- 厚生労働省（2011）『平成23年版 労働経済白書』日経印刷
- 内閣府（2011）『平成23年版 子ども・若者白書』佐伯印刷
- 文部科学省（2011）「平成23年度 学校基本調査速報」2011年8月4日発表
- 常見陽平（2010）『くたばれ！ 就職氷河期』角川SSコミュニケーションズ
- 上西充子(2009)「大学生の現状とキャリア形成支援」小杉礼子編著『若者の働きかた』ミネルヴァ書房
- 矢島正見・耳塚寛明（2005）『変わる若者と職業世界—トランジションの社会学』学文社

表4 進路成熟尺度

◇ 次の文章をよく読んで、自分の気持ちや考えにもっともよくあてはまるものの数字を一つ選んで、○で囲んで下さい。		1	2	3	4	5
		ほとんどあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	かなりあてはまる	非常にあてはまる
1.	私は、生きがいのある生活を送りたいと思う	1	2	3	4	5
2.	私は、自分の将来についていろいろ計画を立てている	1	2	3	4	5
3.	私は、これから先の進路をまだ決めていない	1	2	3	4	5
4.	私は、自分の力で自立した生き方をしたいと思う	1	2	3	4	5
5.	私は、将来の計画をしっかり立てている	1	2	3	4	5
6.	私は、これからの進路についてよく考えている	1	2	3	4	5
7.	私は、自分のいろいろな能力を十分に生かしたいと思う	1	2	3	4	5
8.	私は、希望する職業につくために、特別な勉強や準備をしている	1	2	3	4	5
9.	私は、どんな生き方がよいのか、わからない	1	2	3	4	5
10.	私は、自分の人生をもっとすばらしいものにしたいと思う	1	2	3	4	5
11.	私は、はっきりとした将来の目標をもっている	1	2	3	4	5
12.	私は、自分がこれからどのように生きていくのか、よくわからない	1	2	3	4	5
13.	私は、自分が本当に満足できる仕事につきたいと思う	1	2	3	4	5
14.	私は、将来つきたい仕事、自分に向いているかどうかを検討している	1	2	3	4	5
15.	私は、自分のこれからの進路を自分で決めていく自信がある	1	2	3	4	5
16.	私は、自分の得意なことをもっと伸ばしたいと思う	1	2	3	4	5
17.	私は、将来の仕事や職業についていろいろ考えている	1	2	3	4	5
18.	私は、こういう仕事をしたいという希望をもっている	1	2	3	4	5
19.	私は、人間的に成長したいと思う	1	2	3	4	5
20.	私は、将来つきたいと思っている仕事の内容をよく理解している	1	2	3	4	5
21.	私は、自分の将来の生き方についてよく考えている	1	2	3	4	5
22.	私は、自分の仕事や職業をとおして、多くの人に認められたいと思う	1	2	3	4	5
23.	私は、自分がどんな仕事をしたいのかよく考えている	1	2	3	4	5
24.	私は、どんな仕事につくかは、その時になって決めればよいと思う	1	2	3	4	5
25.	私は、世の中や社会のために役立つ人間になりたいと思う	1	2	3	4	5
26.	私は、自分が本当にやってみたい仕事は何かよくわかっている	1	2	3	4	5
27.	私は、これからの進路について、今はまだ考えたくない	1	2	3	4	5
28.	私は、自分の仕事や職業をとおして、価値のあることをやり遂げたいと思う	1	2	3	4	5
29.	私は、自分に合った生き方を見つけている	1	2	3	4	5
30.	私は、自分の将来の仕事や職業を決めることに、不安を感じていない	1	2	3	4	5